

## 東上総における平田国学の展開

—— 新出の弓削元宏家所蔵資料を中心に ——

### はじめに

東上総の神、群は、上総十二社祭によって知られている。それでは、近世・近代移行期の神道・神社の大きな転換期に、東上総の在地神職たちは何をしていたのであろうか。

当該地域には、平田国学の拠点があった。神職中心の比較的小規模な門人グループであり、中心人物は弓削春彦である。この平田門人グループに注目することで、右の問題の一端に迫ることが可能であるように思われる。東上総における平田国学の研究を振り返ってみたい。

『和学者総覧』に、東上総の平田門人弓削春彦の記述は

みられない。また、『千葉県の歴史 通史編近世2』（二〇〇八年三月九七七〜九七八頁）から東上総の平田国学に関する記述を抜粋すれば、

(a) 「一八一九（文政二）年四月、上総国長柄郡中原村（岬町へいすみ市）玉崎社の神主・弓削春彦が入門した。」

(b) 「弓削の紹介では、一八二二（文政五）年三月、長柄郡関村（白子町）白子大明神神主の岡沢寛政が、一八二四（文政七）年八月に長柄郡宮成村（長生村）三島大明神神主の田中石見が、翌年六月に夷隅郡札森村（夷隅町へいすみ市）桑名大明神神主の高師山城が入門している。」

(c) 「一八二七（文政十）年八月、弓削の紹介で長柄

中川 和明

那一宮本郷村（一宮町）玉前社の社家・風袋造酒が入門した。風袋自身もまた古学の弟子をとっていた。」

となる。右の(a)と(c)は、いずれも平田塾の『門人姓名録』が根拠である。このように東上総の平田国学に関する研究は、比較的低調であったといえよう。

一方、二〇〇〇年代には、宮地正人と三浦茂一が弓削元宏家所蔵資料の調査を行った。筆者は右の両氏が調査した同資料の写真を解読・検討したのである。

弓削鳴岳<sup>6)</sup>（一七三八—一八〇五）は徂徠門人宇佐美瀧水に師事した儒者であるが、その子が平田門人の弓削春彦である。上総国の平田国学を研究するうえで弓削元宏家所蔵資料はたいへん貴重なものといえよう。これまで手薄であった東上総の平田国学を研究することが可能となったのである。

本稿では弓削春彦（中原玉崎神社神主）を中心に、東上総における平田国学の展開を見ていくことにする。それによって、東上総における神職・神社の動向の一端を明らかにしたいと思う。なお、本文末に資料紹介を兼ねて、「弓削家宛平田鏡胤書簡集」を付した。

## 一、弓削と東上総の平田門人

東上総に、平田門人はどれほどいたのであろうか。『門人姓名録』によって、東上総（山辺郡・長柄郡・夷隅郡）の平田門人を一覧表にすれば、【表1】のようになる。

これによれば、東上総で最初に平田塾に入門したのは、文化二年（一八一四）入門の柴田秋之助である。柴田がどういった人物なのか、平田塾の日記にも登場しないので詳細は不明である。

文政二年（一八一九）に、篤胤が両総を遊説している。その際、柴田が紹介者となって、弓削を含む数人が入門することになる。これを契機として、東上総から門人が増加した。同年に入門した多田蜂次郎は、後に武蔵国一之宮氷川神社の神職（岩井中務）になる人物である。岩井は篤胤の『仙境異聞』にも登場している。また、風袋造酒は上総一之宮玉前神社の神職で、平田塾にも頻繁に來ている人物である。風袋については、また別に詳しく述べることにしたい。

【表1】のように、弓削が紹介者となって東上総から六

【表1】上総国長柄郡・夷隅郡の平田門人

No.	姓名	入門年	紹介者	実名ほか	居住地	年齢	現在地
66	柴田秋之助	文化11年	横尾房守	後白鳥氏、 源義信	「常陸国行方郡長山村産」上総国長柄郡 宮原村神主白鳥	40	長生郡一宮町
215	弓削周防	文政2年4月13日	柴田秋之助	春彦	長柄郡中原村玉崎 神々主	55	いすみ市岬町中 原3628 玉崎神社
216	弓削出雲	文政2年4月13日		是雄	長柄郡中原村玉崎社 春彦男		いすみ市岬町中 原3628 玉崎神社
217	狩野主膳	文政2年4月15日	柴田秋之助	播磨、藤原 保吉	長柄郡一ツ松村第六 天神諏訪社両社神主	37	長生郡一松丙916 一松神社
218	斎藤宮内	文政2年4月	柴田秋之助	藤原勝之	長柄郡高根本郷村	49	長生郡長生村
219	多田蜂次郎	文政2年閏4月17 日	柴田秋之助	重満、 伊子、 岩井中務	長柄郡関村白子明神 主岡沢氏養子	21	長生郡白子町関 5364 白子神社
260	岡沢織部	文政5年3月1日	弓削春彦	藤原寛故	長柄郡関村白子明 神々主	23	長生郡白子町関 5364 白子神社
262	黒須玄蕃	文政5年3月5日	弓削春彦	真寿雄	長柄郡六地藏村羽黒 社神主		長生郡長柄町六 地藏529 武峯神 社
299	田中石見	文政7年8月24日	弓削春彦	保種	長柄郡宮成村三嶋明 神々主		長生郡宮成232 三嶋神社
300	白鳥斎宮	文政7年11月15日	弓削春彦	藤原義教	長柄郡宮原村南宮明 神々主	20	長生郡一宮町宮 原1131 南宮神社
307	高師山城	文政8年6月12日	弓削春彦	藤原信任	夷隅郡礼森村桑名明 神々主	30	いすみ市礼森68 桑名神社
322	風袋造酒	文政10年8月5日	弓削春彦	藤原元則	長柄郡一ノ宮玉崎神 社々社家	27	長生郡一宮町一 宮3048 玉前神 社
1532	吉野平十郎	慶応2年3月26日	平井道節	義卷	夷隅郡植野郷名木村		勝浦市
3457	三輪和泉	明治2年11月8日		亮貞	上総国大多喜横山村	31	夷隅郡大多喜町

【注1】No.は『門人姓名録』（新修平田篤胤全集別巻）を参照。

人入門した。こうして弓削を中心とするグループが形成されたのである。文政五年から同一〇年の間に、次第に門人が増加した。それは、文政六年に篤胤が上京していることと関係しているであろう。篤胤と神道の本所吉田家との関係が強化されたことで、神職たちへの平田国学の影響力が増したと考えられる。

また、東上総の門人の多くが篤胤生前に入門していることにも注目する必要がある。全国的な傾向としては、没後の門人の方が多いのであるが、東上総では逆になっている。地域的な特性が関係しているのであろう。

## 二、『気吹舎日記』・『仙境異聞』の弓削

### (1) 『気吹舎日記』と弓削春彦

平田塾の日記である『気吹舎日記』の中には、弓削春彦に関する記述が散見されるが、それらの記事を抜粋すれば、【表2】のようになる。文化一三年の篤胤の旅行は下総訪問が中心であるが、上総も訪れている。文政二年（一八一九）の再旅行のときに篤胤が中原村を訪問しているが、この際に弓削宅に寄ったと考えられる。

文政九年に平田鉄胤が両総を訪問しており、弓削とも会見している。国学の浸透には鉄胤の役割も見逃せないであろう。鉄胤の遊説については、別稿でまた詳述したいと思う。

【表2】によれば、弓削は塾から『靈能真柱』・『草木撰種録』（二枚摺一〇〇部）・『毎朝神拝詞記』・『宮比神御伝記』・『玉櫛』・『大扶桑国考』・『皇典文集』などの書籍を購入していたことがわかる。平田塾の刊行する書籍を次々に購入して積極的に学んでいた。弓削はグループで必要な書籍をまとめて購入する役割を果たしていたのである。グループの中心人物としての弓削の大切な役割であった。

このうち、『草木撰種録』（一枚摺一〇〇部）は、弓削のグループによって近隣の農民に配布されていたと考えられる。

文政一二年（一八二九）一月に、塾が弓削へ『毎朝神拝詞記』を送った記事が見えている。これについては同一二年（一八二九）一月二四日付弓削春彦宛平田鉄胤書簡（書簡2）参照）にも、神拝式一〇部（毎朝神拝詞記一〇部）を送付したことが記されている。日記の記

【表2】『気吹舎日記』にみる弓削春彦

年月日	事項	頁
文政2年間4月2日	八時すぎ中原へ着	122集13頁
同3年4月20日	中原村弓削氏より易蒙引唐本、五経大全、手紙添て来	122集18頁
同3年4月25日	弓削氏頼之本両部、越中屋文次郎方え七十奴ニ払ふ、受取来ル、序ニ弓削氏え遣すべきこと	122集18頁
同3年6月10日	竹内来ル、イセ小川地・上総弓削氏手紙認めたのむ	122集25頁
同3年6月11日	イセ小川地・カヅサ中原手紙出す	122集26頁
同4年1月24日	弓削より手紙来ル、天神中郭注文也	122集35頁
同4年1月29日	弓削氏へ手紙出す、御伝記十遣す、百文飛脚ちん也、珍平使也	122集36頁
同8年9月4日	弓削春彦主入来	研究950頁
同8年9月27日	弓削(春彦)より書状来	研究951頁
同8年10月28日	弓削(春彦)氏より書状金子添来	研究954頁
同8年12月21日	弓削(春彦)より金壹両三步入書状来	研究957頁
同9年5月11日	(鉄胤)早朝より中原へ行、勇太郎を高師へ弓削氏を留に遣す	122集38頁
同9年5月11日	(鉄胤)弓削氏を出立	122集38頁
同9年5月11日	朝弓削(春彦)氏へ行、此夜同所に宿	研究970頁
同9年5月14日	朝中原を出ち、弓削老は先に出立なり	研究970頁
同9年5月22日	弓削(春彦)氏御入来	研究971頁
同9年7月3日	弓削(春彦)より書状来	研究975頁
同9年9月29日	弓削(春彦)氏頼遣ス	研究982頁
同9年10月13日	今晚上総弓削(春彦)氏へ惣八を遣ス	研究983頁
同9年10月18日	今朝惣八昨夜上総より帰れるよしにて弓削(周防常任)書状持来ル	研究984頁
同9年10月23日	弓削氏出立	研究984頁
同9年12月17日	弓削老「二男」(出雲の弟)入来	研究988頁
同10年1月24日	上総中原へ書状出す	研究992頁
同10年3月15日	上総弓削(春彦)より書状来	研究996頁
同10年5月9日	弓削氏(春彦)出立	研究1000頁
同10年8月3日	上総一ノ宮道家風袋造酒(元則)と云者、弓削老(春彦)の書状持て来ル	研究1009頁
同10年8月24日	上総夷隅郡仲村勘解由来、弓削出雲(春彦の男是雄)不慮の事に付同道にて出府のよし也	研究1010頁
同10年9月24日	弓削(春彦)より書状、文左衛門と云者持参、同人此方に留居	研究1013頁
同10年10月1日	弓削出雲(是雄)同道に白山へ行く	研究1014頁
同10年10月15日	弓削出雲(是雄)・風袋造酒(元則)来	研究1015頁
同10年10月29日	風袋造酒来・弓削出雲(常任)来	研究1016頁
同10年11月10日	弓削出雲(常任)七日に急出立のよし、置手紙来ル	研究1017頁
同11年2月29日	弓削周防(春彦)入来	研究1028頁
同11年3月10日	弓削周防(春彦)来	研究1029頁
同11年3月11日	鈴鹿播磨守(吉田家家老)・同陸奥守の書状、宮川(弾正)氏より弓削(春彦)氏持参	研究1029頁
同11年9月21日	右衛門を諸所へ遣ワすに付書状認る、弓削・風袋・石津伯玄・岡野大和等へ也	122集54頁
同11年10月22日	上総中原(弓削春彦)へ書物并に本添て出す、越後(〜)開題記、上総(〜)真柱也	研究1052頁

同12年3月26日	弓削周防(春彦)来、逗留	研究1068頁
同12年4月28日	弓削(春彦)へ書状、真柱一・種撰録百部遣す	研究1072頁
同12年8月11日	弓削(春彦)并岡澤(織部)へ書付遣す	研究1082頁
同12年10月3日	上総中原より夷隅郡の願書到着	研究1087頁
同12年11月27日	上総弓削(春彦)へ神拜式添て書状遣す	研究1093頁
同12年12月24日	上総弓削(春彦)へも書状遣す	研究1096頁
天保1年4月25日	上総齋藤宮内来、弓削へ宮比様御伝記三部託し遣す	128集23頁
同1年8月26日	弓削へ書状遣す	128集29頁
同1年11月8日	上総弓削より書状到来	128集32頁
同1年12月25日	上総中原より書状来	128集34頁
同1年12月26日	夜、弓削周防之書状宮原飛脚へ出す	128集34頁
同2年1月17日	風袋造酒より書状到来、弓削よりも来る	128集35頁
同2年2月5日	上総弓削へミはしら四部書状添遣ス	128集36頁
同2年7月19日	弓削周防書状到来	128集41頁
同3年4月23日	上総弓削へ玉襷書状添	128集51頁
同3年10月26日	弓削周防へ書状添	128集59頁
同3年11月21日	弓削周防書状到来	128集60頁
同3年12月21日	弓削周防、八鈿伊勢へ□(虫損)々遣す	128集62頁
同4年2月9日	風袋造酒へ返書并ニ弓削父子へ祝書遣す	128集65頁
同4年4月25日	岡沢織部書状到来、弓削之事也	128集67頁
同4年5月7日	弓削周防方書状到来	128集68頁
同4年5月10日	弓削周防方へ返書遣	128集68頁
同4年10月28日	荒井静右衛門・弓削周防・八鈿伊勢・尾沢白鳳等へ辟穀十包ツ、書状添遣す	128集74頁
同4年12月12日	弓削周防書状到来	128集76頁
同5年7月18日	殿村佐六・川村作右衛門・八鈿伊勢・弓削周防・風袋造酒・岡沢織部・君塚茂兵衛等へ書状添、各折本一冊ツ、遣す	128集84頁
同5年10月28日	弓削周防方へ返書遣先祖靈祭祝詞御加筆清書出来に付、書状添出す、玉襷一帙望ニ付遣	128集87頁
同5年12月8日	弓削周防到来	128集89頁
同6年4月6日	弓削周防方へ玉たすき三冊・のりと二十五、書状添出	128集93頁
同7年4月14日	弓削周防へ玉襷遣	128集106頁
同7年4月25日	弓削周防・斎藤采女書状到来	128集106頁
同7年8月2日	宮内主水方へ向け賀会摺ものを連中へ贈る、弓削周防方右同断	128集109頁
同7年11月2日	日々新刻本配布、弓削周防方へも書状添出	128集112頁
同7年12月9日	弓削春彦書状到来	128集113頁
同7年12月11日	弓削春彦へ返書遣す、玉襷一三四ノ一帙外二四ノ卷一冊遣す	128集113頁
同8年2月27日	弓削周防へ扶桑国考・玉襷一三、五ノ卷三部書状添出	128集115頁
同9年2月13日	弓削周防へ皇文一冊書状添出す	128集125頁
同9年3月8日	弓削之書状到来	128集125頁
同9年8月22日	弓削春彦書状到来	128集130頁
同9年9月7日	弓削周防・金杉丹波へ書状出	128集131頁
同10年3月9日	弓削春彦来	128集136頁

事と書簡の内容が符合していることがわかるであろう。

『毎朝神拝詞記』は、毎朝の神拝の際の祝詞を記したものである。在地の神職にとつて不可欠の書籍であった。

弓削がまとめてこの書籍を購入していることから、弓削のグループの規模が一〇人ほどと推定されるであろう。

なお、本稿の巻末の書簡集の【書簡1】・【書簡2】によれば、平田側が弓削に資金援助の依頼をしていたことがわかる。

## (2) 『仙境異聞』と弓削の人柄

文政三年一〇月、篤胤は初めて仙童寅吉に出会った。

この少年と多くの問答を重ねて『仙境異聞』を著すことになる。ここで『仙境異聞』について詳述する余裕はないが、同書の中に一か所、弓削が登場しているので触れておきたい。文政三年（一八二〇）末から同四年初め頃の内容で、

「別に□□といふ人は、今までかつて名も面も知らぬ人なれば、憎みを受くべき覚えはなきに、然る作り言して誹ることはいかなる意ならむ。また此後に

上総国中原村なる、玉依姫社の神主弓削春彦が来て、

我が許へ来ざる前にかねて知人なれば、□□が許に立

よりけるに、余が事に及びて、大竹氏にて云へる如く、

甚く誇りて此ほど彼の童子は召し捕られ、平田も其事

にて御尤を受たりと語りし故に、心ならず彼所より参

りつと、余が事なき体を見て悦びつつぞ語りける。彼

の人（上記の□□の人物―中川注）のしか人ごとに我

を誇り聞かすこと、返す返す不審なり。」（『新修平田

篤胤全集』全巻九卷所収『仙境異聞』四〇五頁）

とある。篤胤が危機的状況にあるという噂を耳にして、

弓削は塾に飛んできたという。弓削の性格が垣間見える

エピソードといえよう。右の話は何気ない事柄のように

も見えるが、弓削のような資料の限られた門人について

は、人となりがわかる右の記録はたいへん貴重なもので

ある。

## 三、「木匠祖神」とその頒布

平田塾では一枚摺の様々な刷物を作製して頒布していた。「木匠祖神」も、そうした一枚物の刷物の一つである。これは従来の平田国学研究ではまったく注目されて

こなかつたものである。大工の祖神を記したものであるが、次に、この刷物の翻刻を掲載する。実物は、三神号（八意思兼大神・手置帆負命・日子狭知命）があつて、その下に篤胤による神徳の解説がなされているのである。ここでは、紙幅の都合上、便宜的に三神号を右側に記して、その左側に篤胤の説明を配しておいた。

①弓削元宏家所蔵資料の刷物「木匠祖神」

手置帆負命

八意思兼大神

日子狭知命

掛巻も畏ぎ。伊邪那岐伊邪那美命の八尋殿は更なり。神代の始め天神等の宮は。奇霊なる御徳もて化作給へるにて。其趣は古史伝に具に記せるが如し。斯て天照大御神天岩屋に幽居坐る時に八意思兼神八意に思慮り坐て、手置帆負命日子狭知命に大御乃新宮を造らしめて遷し奉れる。是ぞ木匠の事の見えたる始なる。爰に上総国長柄郡中原村なる。豊玉毘売命社の神主弓削春彦老翁なむ。古へ学にこよなき有功人なるが。木匠等の古道に心厚きが請なむに与へまし。

いかで其神の御名を書てと請の七度せらるゝ黙止もえ有らで。請の麻々迹々身ずから筆とりて。物忌しつゝかくは書奉りつ思兼神を中に書奉れるハ。何わざにまれ八心に思慮り用ふる事は此神の御霊の幸蒙らでは得有らぬが上に。彼新宮造れる事も。此大神の思慮より始まれる事なればぞかし。木匠等この三神の御霊をし。おほにな思ひ奉りそよ。

文政七甲申年十一月十五日平篤胤謹白（花押）

②『新修平田篤胤全集 補遺二（神道・佛道）』所収の刷物「木匠祖神」

手置帆負命

八意思兼大神

日子狭知命

掛巻も畏ぎ。伊邪那岐伊邪那美命の八尋殿は更なり。神代の始め天神等の宮は。奇霊なる御徳もて化作給へるにて。其趣は古史伝に具に記せるが如し。かくて天照大御神。天岩屋に幽居坐る時に。八意思兼神。八意に思慮り坐て。手置帆負命。日子狭知命に。大御乃新宮を造らしめて遷し奉れる。是ぞ木匠の事の



見えたる始なる、爰に今木匠等の、其道に心厚きが、常に齋奉らむ御霊代に、いかで此神乃御名を書てと、麻々黙止もえ有らで。身ずから筆とりて。物忌しつゝ斯は書奉りつ、思兼神を中に書奉れるハ。何わざにまれ、八心に思慮り用ふる事は、此神の御霊の幸蒙らでは得有らぬが上に。彼新宮を造れる事も、此大神の思慮より始まれる事なればぞかし。木匠とあらむ者は、この三神乃御霊をし。おほにな思ひ奉りそよ。

文政八乙酉年五月 神祇道学者 平篤胤謹白

右の①と②の年代と作者を比較してみると、①では文政七年一月一五日付で「平篤胤謹白」、②は文政八年五月付で「神祇道学者 平篤胤謹白」となっている。①が出来て半年後に、②が出来たことがわかる。②の「神祇道学者」は、篤胤が吉田家から得た称号である。

また、右の①の傍線部分が②にはないことがわかる。弓削が七回にもわたって懇願したことで、篤胤が書く気になったという。弓削がいなければ、この一枚摺が出来上がることはなかったはずであり、弓削の功績は無視で

きないであろう。篤胤は弓削について「古へ学にこよなき有功人」と評価しているのである。

平田塾は、①から弓削関係の記述を削除して、②を作製している。すなわち、①が東上総の弓削グループ用のものになっているのに対して、②は全国向けの内容となっているのである。平田塾では、①に手を加えて一般的な内容にした②を、全国の門人などに向けて頒布していたのである。

弓削はこの三神号を地元の大工たちに頒布していたものと考えられる。なお、弓削家には①の版木が残されている。塾側としては②の版木は塾にとどめておく必要があるが、①の版木は弓削側に渡して差支えがないのであった。

#### 四、『玉櫛』巻四と弓削

弓削春彦は、しばしば平田塾を訪問しているが、それでは一体、塾で何をしていたのであろうか。例えば、平田塾では篤胤の重要な著書『玉櫛』巻四を天保五年（一八三四）六月に刊行している。『玉櫛』は先に述べた『毎

朝神拝詞記』を詳しく注解した講釈本であつて、平田国学の基本的な書籍の一つである。

この『玉櫛』巻四は、篤胤著で大野尚芳・弓削春彦・宮内嘉長の三人が校合を担当した。このうち弓削春彦以外の二人であるが、大野半解（尚芳）は『門人姓名録』No.156（『新修平田篤胤全集』別巻）に記載されていて、文化一三年入門し、松平織部正殿家中である。『玉櫛』巻四の外に『神字日文伝』の校合者でもある。宮内嘉長は下総の代表的な門人である。

『玉櫛』巻四には、吾妻国三社（鹿嶋、香取、息栖の三社）について詳細に記されているが、上総に関する記述はない。弓削が校合に加わっているが、上総についての知見が生かされているわけではないのである。

この『玉櫛』巻四が刊行された翌月、平田塾から弓削へ書簡が送られている。すなわち、【書簡3】の天保五年（一八三四）七月一七日付弓削春彦宛鋳胤書簡には、

今般玉たすき第四ノ巻上木出来申候間一冊進上仕候、

実二此巻八大二実のある所二御坐候間、御熟覽可被下殊二貴所様御校合ニも相成居候得者思召之儀も御坐候ハ、早々被仰下候様仕度候、仍而出来早々御

呈し申候、

と記されている。『玉櫛』巻四を弓削に進上するとともに、出来上がったこの版本について意見を求めているのである。

篤胤の重要著作の校合に携わっているのであるから、弓削の役割は無視できないであろう。校合者として名前を連ねることによって、全国の門人が「弓削春彦」の名を知る機会となつたとみられる。

## 五、『先祖霊祭祀詞』と神主たち

平田門人は先祖祭祀を如何に行つていたのであろうか。江戸時代の寺請制度の下であるため、公式には仏式のそれが中心であつたはずである。但し、私的な場では神道式の祭祀を営むことも可能であつたと考えられる。これは神道の自立を目指す地方神職の密かな活動である。

【表2】の天保五年（一八三四）一〇月二八日の記事には、「弓削周防方へ返書遣先祖霊祭祀詞御加筆清書出来に付、書状添出す」（二八集八七頁）とある。これによれば、弓削から送られた『先祖霊祭祀詞』に、篤胤が添削

して返送していただくことがわかる。

『先祖霊祭祀詞』（弓削元宏家所蔵資料）の奥書をみてみると、

此はしも上総国長柄郡中原町なる玉依比売命の社に  
仕へ奉る弓削ノ春彦をぢが思い立し先祖祭りの祝詞

なるを自から書て己に正し見て給ひねと請はるるに  
ここかし言加へたる、時は天保五年といふ年の十

月二十日より五日の日なり 平篤胤 花押

とある。つまり、篤胤は奥書を書いてから三日後に弓削  
にこれを送っていたのである（〔表2〕参照）。

また、この『先祖霊祭祀詞』の本文より一部分を抜粋  
すれば、

遠津御祖ノ御霊代々ノ御祖親族諸御霊等ノ御前みはつこ二子孫  
姓名、近とほつみおや手郷郷ノ大神等二仕奉ル神主等共二……

となる。弓削春彦が近隣の神職を集めて先祖祭祀を行っ  
ていたことがわかる。この中に平田門人がいた可能性が  
あろう。檀家寺などとの軋轢はないか、といったことも  
調べる必要がある。

これまでみてきたように、東上総の平田国学の展開に  
おいて、弓削春彦の果たした役割は決して小さなもので

はないであろう。神道の自立と向上を目指していた近世  
後期の在地神職の姿をそこにみることができるのである。  
弓削が平田門人となったのは、そうした目標のためであ  
ったと考えられる。

## 六、篤胤没後の平田門人グループ

### （1）弓削家の動向

篤胤は、天保二二年正月、秋田に向けて江戸を立った。  
塾の日記では、弓削春彦に関する記事は天保一〇年（一  
八三九）三月九日が最後となり、両者の音信は途絶えが  
ちであった。それでは、篤胤処分後、弓削春彦はどうし  
ていたのだろうか。弘化四年（一八四七）に死去して  
いたことが、『弘化四年丁未五月六日 弓削春彦翁葬祭行  
列式帳面』（弓削元宏家所蔵資料）によって知られる。

次いで、嘉永三年（一八五〇）付の弓削是雄・同御隠  
居宛平田鏡胤書簡〔書簡4〕には、「近年八大二御不沙汰  
仕候、定而御安泰之御事と奉賀候、近頃八御近辺之方々  
御一人も御出無之」とある。これによれば、東上総の平  
田門人グループの人々が最近塾に来ておらず、塾と弓削

家の連絡が途絶えている模様である。

嘉永から慶応期は、全国的には平田門人が急増する時期であるが、逆に東上総では入門者が増えない状況であった。停滞しているように見えるが、次への模索の段階とも考えられよう。

## (2) 弓削元宏家所蔵の書籍

先に見た【書簡1】から【書簡4】には、『毎朝神拝詞記』、『玉櫛』、『古道大意』、『声大統譜』一枚、『古今妖魅考』といった書名がみられる。平田国学の基本的な書籍であり、神職の職務と比較的近い書物であるといえる。弓削のグループではそうした書籍を塾側から購入して学んでいたのである。

また、弓削家における平田国学受容の実態を解明するためには、同家に伝来した書籍も無視できない。【表3】弓削元宏家所蔵資料の平田国学関係書籍によれば、木活字本の『出定笑語』四冊（嘉永二年刊）がみえる。これは春彦が死去した後に刊行されたものであることから、弓削家では篤胤没後も平田国学への関心は継続していたことが推測されるのである。

なお、弓削家の蔵書は膨大なもので、その大半が漢籍である。徂徠学派の漢学者の家でどのような書籍を読んでいたのかを知るうえで貴重な蔵書群である。国学関係では平田国学のみならず、本居宣長などの書籍も残されている。蔵書群全体の特徴などについてはまた別に検討する必要がある。

## (3) 慶応二年入門者の吉野平十郎

全国的には、文久から明治初期にかけて平田門人が急増していった。しかし、平田国学の隆盛というのは、地域差も考慮する必要がある。一律に隆盛していたかのような誤解が生じた。地方的展開はそれほど単純ではなく、それぞれの地域差を考慮しなければならないのである。

東上総では篤胤没後に入門者が途絶えていたが、久々の入門者（吉野平十郎）が登場した。吉野に関するわずかな記録を列挙すれば、【表4】のようになる。この表のように、断片的な記録が残るのみである。書状が塾に来ているが、本人が塾に来たかどうかは不明である。以前の弓削グループとは直接的なつながりはないとみられる。久々に入門者が出たところで、明治を迎えることになる。

【表3】弓削元宏家所蔵史料の平田国学関係書籍

No.	書名	著者	冊数	刊写	備考
1	霊能真柱	平田篤胤	1冊（上巻）	刊本	
2	霊能真柱	平田篤胤	1冊（下巻）	刊本	菅能屋蔵版
3	古史成文	平田篤胤	3巻3冊（1、2、3巻）	刊本	
4	享典文彙	平田篤胤	1巻1冊（上巻）	刊本	
5	宮比神御伝記	平田篤胤	1冊	刊本	
6	出定笑語	平田篤胤	4冊	刊本	佐久良東雄刊
7	古史伝	平田篤胤	3巻3冊（1、2、3巻）	刊本	
8	先祖霊祭祝詞	弓削春彦	1冊	写本	平田篤胤添削（天保5年10月20日）
9	隣駁者	野々口隆正	1巻1冊（下巻）	刊本	
10	葬儀略	百川躬行	1冊	刊本	慶応元年7月刊

【表4】吉野平十郎に関する記録

年月日	記事	備考
慶応2年3月25日	一、三分 入門吉野平十郎	『金銀入覚帳』、『国立歴史民俗博物館研究報告』146集235頁
同 2年4月28日	上総吉野平十郎より書状来	『気吹舎日記』、同128集344頁
同 2年10月8日	上総勝浦吉野平十郎書状等来	『気吹舎日記』、同128集351頁
同 3年3月13日	一、壹分 吉野平十郎	『金銀入覚帳』、同146集265頁

吉野の具体的な活動は明らかではないが、東上総に再び平田国学が盛んになる兆候があったのである。

#### （4）弓削春雄の明治

維新を迎えた弓削家は、その後、どうなったのであるか。明治三年一〇月二九日付の「上総国長柄郡神官戸数人員調査<sup>(2)</sup>」によれば、

中原村 神主弓削春雄  
玉前大神

人数六人  
内男三人  
女三人

とある。弓削家の構成がわかるのである。さらに、「諸願伺届書<sup>(3)</sup>」には、

御請

今般神社職制御改正ニ付是迄ノ職務御差免相成候条、請テ奉戴シ且農ニ編輯可致旨御口達之表奉承  
知奉畏候、依テ当郡中連印書附ヲ以奉請候、以上  
上総国長柄郡

（明治三年）

辛未十二月廿日

上林村	板倉慶雄印
大柴村	麻生吉久印
国昌村	鈴木昌重印
町俣村	船見高行印
下永吉	新田三橋光慶印
本崎村	田辺定義印
椎木村	石田保義印
中原村	弓削春雄印
関村	足沢広林印
栗生野村	秋葉美隆印

## 宮谷県

### 御序

とある。このように弓削家は明治初期に玉崎神社を離れざるをえなくなったが、後に同神社に復帰し、現在に至っているのである。<sup>4)</sup>

### おわりに

以上、弓削春彦を中心に東上総の平田国学の展開についてみてきた。最後に、簡単にまとめておきたいと思う。

篤胤の遊説を契機として、東上総の弓削春彦が入門し、さらに弓削を中心とする平田国学のグループが形成された。弓削春彦は江戸の塾をしばしば訪問するとともに、塾側から神道関係の書籍を購入して熱心に学んでいたのである。

弓削は、一枚摺「木匠祖神」の上木を篤胤に繰り返し要請して実現させた。「木匠祖神」は地元の大工で古道に強い関心を抱く者に配布するためである。弓削周辺の大工たちに平田国学を広めようとしていたのである。「木匠祖神」は東上総の人々に向けたものと、全国の門人向けの二種類あった。前者は弓削が地元で配布するもので、後者は平田塾が前者の刷り物に手を加えたものである。篤胤の評価によれば、弓削は「古へ学にこよなき有功人」であった。

また、弓削は篤胤著『玉擲』巻四の校合者三名の一人であったが、これは弓削本人にとつて名譽であるとともに、全国の平田門人にとっては『玉擲』巻四の刊行は弓削春彦の名を知る機会となったはずである。

さらに、弓削は『先祖靈祭祀詞』の添削を平田塾に依頼して、それを手に入れている。近隣の神職らと先祖靈

祭を行っていたのである。この神職の中に平田門人も含まれていた可能性があらう。

このように、東上総の平田国学の展開において、弓削の果たした役割は決して小さなものではない。神道の自立と向上を目指していた近世後期の在地神職の典型といふべきであらう。

篤胤没後に弓削春彦も、ほどなくこの世を去った。弓削家は平田塾との連絡が途絶えがちになり、嘉永安政期に東上総の平田門人グループの活動も停滞気味となる。

慶応二年に久々に東上総から吉野平十郎が入門し、再度平田派活性化の兆候が見えたところで維新を迎えることになった。

東上総の神社界は、明治に入つて激変する。明治二年一月に宮谷県が皇学所<sup>5)</sup>(大網白里)を設置した。両総の多くの神職らが集う場所となったのである。新時代の到来に適応しようとする在地神職の苦闘とその後については、今後の課題である。

### 「弓削家宛平田鍊胤書簡集」

〔書簡1〕文政二二年(一八二九)八月十一日付

弓削宛平田鍊胤書簡

(前欠・後欠)

手を悉し候得共、何分出来不申候、殊二上方筋金子拾兩斗り盆前二到来可仕もの有之候が間二合不申今以到着不仕候、如何之事哉、此間も以書状様子尋二遣し申候、未返書も参り不申候、右金子か借用か両様之内二て是非差上度、日々二指折て相待候得共、今日迄ハ出来も到着も不仕候、扨々当惑千万之次第御座候、当地大火後ハ少々之借用も出来不申候、家作の書入或ハ質物等も書物なとのぶいきものハ預り不申、殊之外困り居候事二ても貴家二も嘸々御迷惑実以申上様も無之、深く恥入罷在候得共、昨今之才覚二者出来不申候、少し子細有て新刊刻ものも出来いたし候間、来月迄二ハ手元二ても少し之儀ハ都合出来可申候、何とか今一御工面奉願上候、尤前文之両様之内出来次第不時二も差立可申候、此度書状差上候も面目無之候得者、差上不申候而ハ尚更不実二候間、右之段有体二申上候、何卒御腹意なく今一度御都合奉希候、先八右之段申上度用事迄二早々申上候、以上

八月十一日 平田篤真

弓削□□(周防)

【書簡2】文政一二年(一八二九) 一二月二四日付

弓削春彦宛平田鏡胤書簡

一筆啓上仕候、追日寒氣強御座候得共、被成御揃弥御安全可被成御起居奉恭賀候、然者兼て之物段々延引仕候所大キ成難事出来申候、此間一寸申上候通り上方人雜用金七兩余受取可申分漸々着金之趣尤飛脚二而八無之三井御殿の御内人下向二付懇意故相頼候由二御座候方、則当人方へ其趣申来候二付、当人を受取二去ル十九日夜遣ハし候所右之金子受取申候哉、如何不相分候得共、夫切二出奔仕候、誠二く大迷惑仕候二付、種々為尋候得者昨廿三日国方へ罷歸り候趣薄々相知レ申候、極々懇志之人江書置もいたし置候由二御座候、金子も歸り早々可差越趣二も申置有之候よし、誠二謂ゆるブタレタリタ、カレタリとか申事二候、扱々当年ハいか成年二哉此やう二困り事無御座候、何レ二も此金子ハ六ヶ敷取レ候逆も春ならでハ参り不申候、しかし今一口御座候間、夫を樂ミ二相待可申候、右之段申上ずともと存候得共、余り二申訳な

く候間一寸申上候、便りも有かなきかと存候得者、此書状出し申度認申候、何とか工夫仕り差上候様仕度候、誠二申わけのやう成事二候、貴方様斗り二も無外へも少々向ケ置候所、是又仕方無之困り申候、せめて此間差立申候神拜式十部の料二而も万一之御手当とも思召可被下候、万々一今一口参らずとも決而御損毛ハ相掛申ましく近々是非とも相納可申候、先ハ差急キ用事迄二一寸申上度、如此御座候、以上

十二月廿四日 平田内蔵介

弓削周防様

【書簡3】天保五年(一八三四) 七月一七日付

弓削周防宛鏡胤書簡

端裏「弓削様 平田」

一筆啓上仕候、残暑強御坐候得共、先以貴家被為揃倍御清栄可被成御座奉恭賀候、随而当方親父初家族無異罷在候、乍憚御安意可被下候、当年ハ暑気炎烈尤も作物亘數候得者、何よりの御事二候得共御老体之御事、折角御自愛御暮被成候様奉存候、尚此節之御様子御聞せ可被下候一先達而者先祖之祭祀詞御下書之事申上候、如何御承認



被下候哉、其後一向二御沙汰も無之候、乍御面倒いか様二而も俗文二而も雅文二而も謂ゆる竹二木をつきたるやう二ても少しも不苦候由、此事彼事と申事共を御心任せ二御記し出シ可被下候、夫共御面倒二思召候ハ、岡次兵衛などへ御託し被成候ハ、出来可仕奉存候、

一 今般玉たすき第四ノ巻上木出来申候間一冊進上仕候、  
実二此卷八大二実のある所二御坐候間、御熟覽可被下  
殊二貴所様御校合二も相成居候得者思召之儀も御坐候  
ハ、早々被仰下候様仕度候、仍而出来早々御呈し申  
候、先者右之段申上度時候之御見舞旁如此御坐候、恐  
々頓首

七月十七日 平田内蔵介

弓削周防様

玉梧下

尚々出雲様江別段書状も差上不申候、乍憚宜敷御伝進被下度失礼之段御免可被為下候

【書簡4】嘉永三年（一八五〇）一月付

弓削是雄等宛平田鏡胤書簡

改年之御慶不有尽期目出度申納候、先以貴家御揃弥御安

康被成御越年珍重奉存候、随而当方一同無異加年仕候間、  
乍慮外御安意可被下候、右年頭之御祝詞為可申上如斯御  
座候、猶期永日之時候、恐惶謹言

正月吉日 平田内蔵介  
鏡胤（花押）

弓削出雲正様  
同 御隠居様

人々御中

二白近年八大二御不沙汰仕候、定而御安泰之御事と奉賀  
候、近頃ハ御近辺之方々御一人も御出無之、夫故一向二  
御左右承り不申候、御懇意之方々之内御出府も候ハ、御  
左右御聞せ可被下候、扱私方も去ル午ノ年母義病死いた  
し、其後相替義無御座候、御安心可被下候  
一亡父義先年継

公辺云々之御沙汰相蒙候処、旧冬全ク御赦免之旨被仰  
渡難有仕合奉存候、此段御放念可被下候

一此古道大意二冊万声大統譜一枚近頃上木出来候間、進  
上仕候、御受納可被下候、近年ハ学業段々相弘まり申  
候、此段御安悦可被下候、先ハ餘り二久々御左右承り  
不申候間、御見舞旁如此候、此一封相届候ハ、乍御

面倒御返事被下度奉希候、先年妖魅考差上候節も早速  
御返事被下忝安心仕候、仍而 此段相願候、以上

二月廿二日追書 内藏助拜

弓削様

【注】

- (1) 『長生郡人物誌』（千葉県長生郡教育会、昭和元年八月）  
三〇〜三一頁。
- (2) 「上総国長柄郡神官戸数人員調査」『秋葉神社文書』（神宮文庫）。
- (3) 『秋葉神社文書』（神宮文書）  
現在、弓削家が奉斎する神社は、谷上神社（いすみ市岬町谷上）、八幡神社（同市岬町榎沢）、玉前神社（同市岬町椎木）、八坂神社（同市岬町和泉）、玉崎神社（同市岬町中原）である。
- (5) 『皇学入門帳』『秋葉神社文書』（神宮文書）。明治二年一月の門人帳で、百人以上記載されている。